消費者市民社会の構築に関する領域

家庭科で育む、ポジティブで自発的なエシカルマインド
―藍染の実践を軸とした学びの環境づくりについて―

お茶の水女子大学附属高等学校　教諭　葭内（よしうち）ありさ

消費者市民社会の構築に関する領域

家庭科で育む、ポジティブで自発的なエシカルマインド
―藍染の実践を軸とした学びの環境づくりについて―

お茶の水女子大学附属高等学校　教諭　葭内（よしうち）ありさ

国立大学法人お茶の水女子大学附属高等学校の葭内教諭（社会学博士）は、生徒にエシカルマインド（自分の行動や目の前のモノが、社会や環境とどのように関係するのか意識できること）を育むことを目指し、様々な題材を用いて消費者教育の実践的な授業を重ねてきました。中でも、天然藍染を題材とした取組「藍染の実践授業」は高校２年生120名を対象とし、家庭科必修「家庭総合」の授業で2012年度より４年間継続して行われました。

天然藍染は、日本の伝統技術と天然素材が融合しており、エシカル・ファッションと言える題材です。本稿では、同授業の中から外部連携に重点を置き、学校外を対象とした広報冊子「エシカル・ファッション・リーフレット」の作成を行うなど、広く取組の発信を行った2014年度の実践的な授業についてご寄稿いただきました。

1　授業の目的と流れ・指導計画

現代の大量生産・大量消費の経済システムの中では、伝統技術は継承が困難なことも多い。伝統技術は、その土地の暮らしや風土に根ざし、何世代にもわたり受け継がれ、文化を形作ってきた人類の叡智である。伝統技術を守り、次世代へ伝えていくこともエシカル消費と言える。また、天然素材は大量の水を使うなど、必ずしもエシカルなものとは言えないこともあるが、伝統技術で用いられる天然素材はその土地に由来したものが多く、地産地消の観点や、最終的にその素材が土に還るという意味ではエシカルであると言える。

ここでは伝統技術や天然素材がエシカルであることを踏まえ、伝統技術の藍染を授業の題材とした。生徒は、事前アンケートによると、伝統技術は守られるべきものであるという意識は持っているものの、実際に伝統技術に触れる機会は多くなく、また、伝統技術は自分たち若者よりも上の世代のものであるとの意識が強い。伝統技術にじっくりと触れる機会の乏しい大多数の生徒にとっては、その価値判断が難しく、身近に感じにくい存在である。そこで、伝統技術を生徒が体験することにより、生徒が伝統技術を感じる機会を得ること、また、伝統技術の工程を知ることにより、ものが出来上がるまでの「背景」に意識が向かうことを授業の目的とした。さらに、その学びを「自立した消費者」として、他者に発信する機会を授業のデザインに取り入れ、リーフレットを作成

し、生徒が身近な人物に配布することによりエシカルマインドの醸成を図った。

授業は2013年度の終わりに実施した高校１・２年生合同の特別授業（以下に詳述）に始まる。特別授業はエシカル・ファッション会社とも連携して実施した。その後、同１年生が２年生に進級した2014年度の４月から９月にかけて、天然藍染を用いた服作り、ファッションショーおよびファッションカタログ作りから成る一連の授業を教室内で実施した。さらに、授業と並行して、校外への発信を目的に、９月の文化祭では家庭科授業と行事、および外部連携によるチャリティー・ファッションショーが行われた。10月から３月の授業では、「エシカル・ファッション・リーフレット」の作成を行った。リーフレットの作成にあたっては、外部デザイン会社のアートディレクターと連携し、完成後は教員による生徒への意識調査および、活動のフィードバックとして、春休みに生徒による外部関係者への配布および意識調査を行った。最後に、実際にエシカルなビジネスを行う、グローバル企業パタゴニア社による特別授業が実施された。

さらに本授業では、他教科連携として情報科教諭と連携して技術面での支援を受け、東京の高校と徳島県の藍染職人をつなぐ際にICTの活用を行う授業のデザインを行った。指導計画は図１のとおりである。

図１　2014年度２年「家庭総合」指導計画

指導計画（伝統技術と天然素材関連）

高校１年次：2013年度

事前意識調査：2013年度に実施

上級生とLeeJapanディレクターによる特別授業：2014年３月 ……２時間

高校２年次：2014年度

映画「女工哀歌」視聴と感想共有・服と環境……３時間

（教員による藍染液の準備と生徒による観察）授業外・校内

服の製作・藍染職人からのビデオレター視聴……６時間

徳島藍染工房とのオンライン藍染実習（ICT活用） ……２時間

藍染アレンジの服づくりとコーディネート：夏休み課題

クラス内ファッションショーとカタログ作り……２時間

消費の選択と「背景」の理解のワーク・……１時間

パリ・エシカル・ファッションショーのマークを用いてのエシカル消費解説……１時間

（文化祭　チャリティー・エシカル・ファッションショー）

アートディレクターによる「デザイン論」の授業……１時間

エシカル・ファッション解説リーフレット作成……５時間

パタゴニア日本支社長による特別講義……１時間
リーフレットを全国に配布
（春休み課題：生徒は関係者にリーフレットと質問票を配布）

高校３年次：2015年度
リーフレットに関する生徒への意識調査：2015年４月

以下にその概要を述べる。

2　導入授業

⑴　上級生とLeeJapanディレクターによる特別授業

2014年度の２年家庭総合の学習が始まる前年度である１年次の2013年３月に、上級生と外部講師によるエシカル消費の家庭科特別授業を行った。授業は１・２年生合同授業として実施し、環境展示会である「エコプロダクツ2013」にてエシカルについて発表した15名の高校２年生が、下級生と同級生に活動結果を報告した。さらに、「エコプロダクツ2013」の際に連携した、エシカル・ファッションブランドである、LeeJapanを統括するディレクターが、エシカル・ファッションについての講義を行った。

ほぼ全ての１年生がこの特別授業で初めてエシカル・ファッションの概念に触れ、さらに上級生と下級生との交流の中で、下級生は上級生の学びを継承することとなった。

⑵　映画「女工哀歌」視聴と感想共有・服と環境

2014年４月に行った２年生最初の授業では、中国の縫製工場の映画を視聴し、話し合い、私たちが買っている衣服が実際にどのように作られているかを学んだ。さらに、既製服の製作プロセスおよび服と環境についての講義を教員が行った。

3　服の製作と天然藍染実習

このように縫製工場の現状を考えた後に、授業では実際に服を製作した。４月から７月にかけてブラウスまたはワンピースを全員が製作し、完成させた。同時に手ぬぐいを伝統的な方法で藍染し、夏休みに染めた手ぬぐいを自由に服にアレンジして、最終的に藍染を取り入れた服を製作した。

⑴　教員による藍染液の準備と生徒による観察

最初に家庭科教員が伝統製法で藍染の染液を作成し、生徒が日々、発酵の様子を観察した。完全

な形での伝統製法による藍染には、原料として藍葉を発酵させて作る伝統製法の「すくも」を用いる。授業では、徳島県の「すくも」専従職人より最高級の貴重な「すくも」を分けていただき、使用した。藍染液の作成方法は、家庭科教諭が徳島県および高知県の藍染職人より指導を受け、習得したものである。

⑵　服の製作・徳島藍染職人からのビデオレター視聴

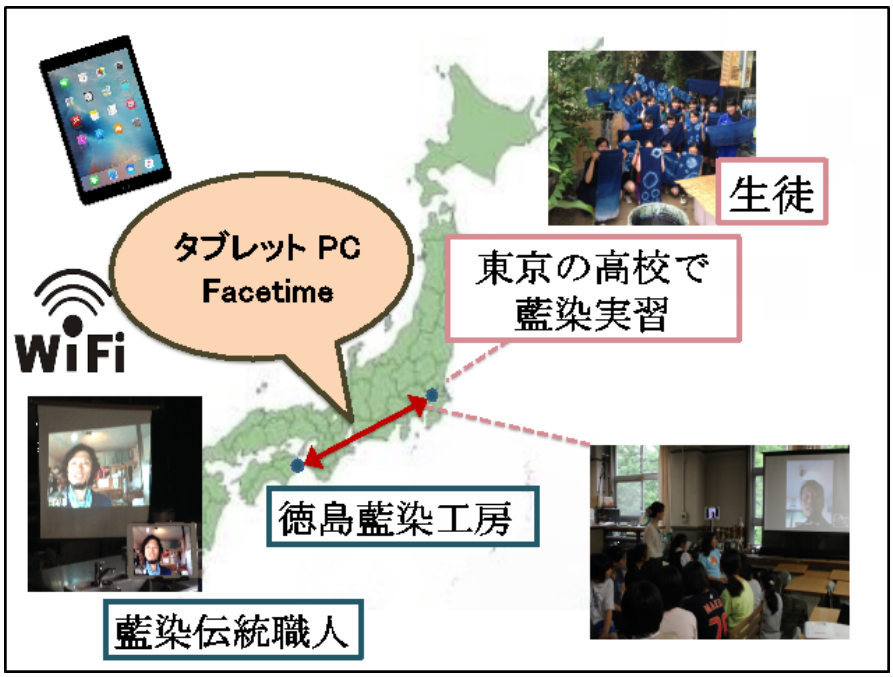
生徒は授業で服の製作を開始した。藍染の事前学習として、徳島県の藍染職人から生徒へのビデオレターを視聴した。

⑶　徳島藍染工房とのオンライン藍染実習（ICT活用）

次に、生徒は高校で藍染実習を行った。その際、ビデオ通話で藍染職人と交流し、職人が手がけるオーガニックの藍畑の様子も見せていただいた。この授業では、東京の高校と徳島県の藍染工房をつなぐ有効な方法としてICTの活用を行った。タブレットPCを用いてインターネットでつなぎ、遠隔地とのビデオ通話による授業を試みた（図２）。高校からは生徒全員が、染めたばかりの自分の手ぬぐいを、ビデオ通話を通じて藍染職人に見せ、一人ひとりの作品に対し講評を頂いた。藍染職人より肯定的な講評を直接もらい、生徒は新たな気づきを得たり、嬉しそうな様子であった。また他の生徒の作品に感心する様子も観察された。この時、生徒からの質疑応答には藍染職人が答えた。

生徒の感想として、藍染実習自体が心に響いたと共に、藍染職人と交流したことへの満足、伝統技術を伝えていきたいという意欲、そしてICTの活用によって、遠隔地とつながれたことに対する驚き等が見られた。また体験したことにより、藍染や伝統技術に関する意識についての変化が伺えた。

図２　徳島県と東京をインターネットでつないでの藍染実習



⑷　藍染アレンジの服づくりとコーディネート

生徒は夏休みに、各自が染めた藍染の布を用いて、服に藍染のアレンジを行った。同時に、完成した藍染の服を手持ちの服や小物で全身コーディネートし、写真を撮り、感想を書くことも課題とした。

４　クラス内ファッションショーとカタログ作り

夏休み明け初回の授業では、完成した手作りの藍染アレンジの服で、クラス内のミニファッションショーが行われた。その後、生徒は、４人班で１枚のファッションカタログのページを作成した。生徒は服を作り、コーディネートやファッションショーを行い、カタログを作ることにより、生産から販売まで一連の流れを体験した。

９月の文化祭では、家庭科で製作した藍染の服と、複数のエシカルブランドから借り出したアクセサリーやバッグ、デニムの服とをコーディネートし、チャリティー・エシカル・ファッションショーも行われた（図３）。藍染グッズの売り上げは途上国女児支援のNGOに寄付した。

図３　製作した藍染の服を用いて文化祭でエシカル・ファッションショーを開催した

5　消費の選択と「背景」の理解のワーク

完成したカタログを用いて、教室で消費の選択を考えるワークショップを行った。これは、商品を選び購入することを体験するもので、エシカル・ファッションの学習につなげることをねらいとした。

ワークを通じ生徒は、商品の選択の理由には、「デザイン」「実用性」「広告」「価格」の他に、もう一つの要素である、商品の作られた「背景」があることを理解した。生徒は、「自分たちが作った」という理由で、自分の班のカタログに肯定的な姿勢を持ったのである。さらに、最も人気のあったカタログを用いて、服の原価を題材として教員の解説と共に生徒同士が議論を行い、商品の「背景」には、知っていると購入したくなるようなポジティブなもの、逆に、ネガティブなものもあることを理解した。

6　パリ・エシカル・ファッションショーのマークを用いての解説

そこで、教員によって、ポジティブな「背景」を持つものとして、エシカル・ファッションが紹介された。教員はエシカル・ファッションの６つのカテゴリーのマークを生徒に示し、エシカル・ファッションの解説を行った。６つのマークは、教員が現地調査を行った展示会である、パリ・エシカル・ファッションショーで用いられていたものである。６つのカテゴリーは、リサイクル、フェアトレード、オーガニック、天然素材、伝統技術、そしてソーシャルプログラムであり、事例やワークを交えて授業を行った。最後に、アパレルに限らず全てのものに生産から廃棄までの「背景」があることを生徒は理解し、配布したフェアトレードチョコレートを食した。

7　伝統技術に関する生徒の活動

⑴　学校外での活動

授業を受け生徒らは、校外でのボランティアワークショップの開催、各種チャリティー企画の開催、コンテスト応募など自発的な活動が多数見られた。

⑵　リーフレットの作成

このように、体験や講義によって学びを深めた生徒に、次の段階として「他者に発信する授業」を行った。発信の方法として、リーフレット作成を行った。その際、デザイン会社のアートディレクターと連携し、授業で生徒に指導・助言を行った。

リーフレット作成に際して生徒は、班の方針を話し合い、アートディレクターから助言を受けた。生徒の話合いは、各エシカルカテゴリーの重要性や、他者に何を伝えるべきかについて、深まりを見せた。最終的に、完成した24の作品から、教員とアートディレクターとで、最優秀のリーフレット案を複数選び、採用した。さらにアートディレクターが、生徒の考えたイラスト、写真や写真の配置の方法などを整えた。写真は、版権に配慮して教員が整えた（図４）。

図４　生徒の案（左）をアートディレクターが整えたリーフレット（右）

リーフレットは、持続可能な森林認証である、FSC認証紙が用いられ、さらに環境に配慮したベジタブルインクを用いて900部印刷された。完成したリーフレットは、全国全ての国立大学附属高等学校、消費生活センター、および文部科学省に配布した。また、各生徒は、春休みの課題として一人につき３～５冊のリーフレットを知人に配布し、その際に５つの質問項目と自由記述から成る意識調査を行い、375回答が得られた。

8　エシカル・ファッションのグローバル企業パタゴニア社による講義

リーフレット作成後、サステナブルなグローバル企業であるパタゴニア日本支社長による特別授業が行われた。ワークショップも交えながら、環境や人権に配慮する理念を中心に、ビジネスでの取組が語られた。日本支社長からの質問には、生徒が授業で培ったエシカル消費に対する理解を持って答える様子が観察された。この講義は、生徒がビジネスの現場における実社会の様子を知る機会となった。

9　まとめ

以上のように、生徒は伝統技術に着目したエシカル消費を、実際に天然の藍染という伝統技術に触れながら学び、リーフレット作成による発信活動を行った。このことは、生徒の伝統技術への肯定的な感情と共に気づきにつながった。さらに、生徒自身が藍染を活用した服を考えて製作することにより、現代の生徒の感性と創造性を活かしながら、１枚の布から服が出来上がるまで、さらにカタログ作りやカタログを用いたワークを通して販売、消費までを擬似体験することにより、全ての物が持つ「背景」といった、エシカル消費に関係することに意識を向けることができた。各生徒がコーディネートした服やカタログを、クラス内で共有し話合いを行ったことは、学校教育の良さを活かしたものと言える。

さらに、体験した後のリーフレット作成により、生徒は学びを整理し、理解や意識を高め、自立した消費者の行動と言える発信活動を行った。生徒が他者へエシカル消費を「発信」することは、それを受け取る家族や友人といった関係者にもエシカル消費を広める機会となった。その際のやりとりの中で身近な友人や家族が生徒を肯定することは、生徒の意欲とエシカル消費への肯定的な意識を高めることが示唆され、伝統技術を含む消費の背景への「自分ごと」化につながったことが伺えた。

もっと知りたい方はこちら！

藍染の実践授業が掲載された葭内博士の英語論文：

YOSHIUCHI, Arisa(2017), Learning about Ethical Fashion in Home Economics Classes: Experiences, Lectures, and Information Technology as Tools for Consumer Education, International Journal of Home Economics , Vol.10(2), 64-76.